

中国語母語話者の日本語習得における
「は」と「が」の誤用の傾向と原因についての考察
—中国国内の日本語学習者を中心に—

焦 宗艶

1. はじめに

外国人が日本語を学習する場合、困難を感じる問題の一つに「は」と「が」の使い分けの問題がある。なぜ「は」と「が」の使い分けが外国人にとって難しいのかについて、まず「外国語の多くは助詞に相当するような形式をほとんど持たないか、持っているとしても日本語の助詞のあり方と違って、そのために助詞全体に対する理解が困難であることが基底にある。さらに、「は」と「が」は「主語」「主格」「主題」といった日本語の構文の最も重要な部分に関わり、述語とともに日本語構文の根幹を担うものであるだけに、その現れ方も複雑であって、それが「は」と「が」の理解の困難な理由の一つになっている」¹。

日本語の助詞に相当するものを持たない中国語を母語とする日本語学習者にとって、助詞の習得は大変困難である。その中でも、「は」と「が」の使い分けは非常に難しく、上級になっても間違いが多い項目のひとつである。

本研究では、中国国内の日本語学習者を対象に「は」と「が」に関するアンケート調査を行い、その結果を分析し、中国語母語話者の「は」と「が」の習得において、どのような誤用の傾向があるのかを明らかにしたい。また、誤用が高い項目に対する質的分析により誤用を招いた要因はどこにあるのかを明らかにする。さらに、学習者が使用している教科書において、「は」と「が」の使い方についてどのような説明をしているのかを調査し、教科書が「は」と「が」の習得度にどのような影響を与えるのかを明らかにしたい。最後に、中国国内の日本語教育現場における「は」と「が」の指導についての注意すべき点を提言したい。

2. 先行研究

「は」と「が」について、山田孝雄、松下大三郎以来、多数の研究がなされ、その

¹ 佐治 (1959) からの引用。

中で、三上章と野田尚史の学説が日本語教育の場で多く使われている。

三上 (1953) は日本語の文の基本的構造を「主題 (題目)」と「解説」からなる「題述関係」であると考えた。主題を持つ文は有題文といい、「は」で表すことが多い。「が」は格助詞で「主格」を表す。「は」は題述レベルでさまざまな格の代理をしている。三上はこれを「ハ」の「兼務」と呼んでいる。

野田 (1996) は今までの研究を踏まえて、複文における「は」と「が」の係り方の違いや談話・文章における使い方にも言及し、独自の視点を織り込みつつ巧みに整理した。野田によると、「は」は係助詞で、基本的な性質は「主題」を示す働きであるとしている。「が」は主格を表す格助詞で、動作や状態の主体「主語」を表している。「は」と「が」を適切に使い分けるためには、「新情報」と「旧情報」、「判断文」と「現象文」、「対比」と「排他」、「単文」と「複文」などについての理解を必要とする。

「は」と「が」の習得研究においては、坂本 (1996、1997) によると先行研究の一般的な結論では、すべての「は」のほうが「が」より正用率、正答率が高いことが述べられている。機能別の正用順序は研究によって多少異なるが、「は」の機能別の正用順序に関しては、主題の「は」は対比の「は」より正答率が高いとのことである。

八木 (1996) は、留学生の作文を対象に、終助詞を除く助詞すべての正用率と機能別正用率を分析した。「は」に関する機能別の正用率では、「主題」の「は」の正用率は「対照」の「は」と大きな差があることが分かった。

謝・金城 (2005) は、中上級の中国人学習者と韓国人学習者を対象に「は」と「が」の穴埋めテストを行った。「は」と「が」の複文での使用、及び文脈、場面に決定される使用は、両グループにとって理解しにくいことが明らかになった。

野田 (2001) は、「が」より「は」の正答率が高いのは、「は」が早く確実に習得されているためではなく、学習者には、主語には「は」をつける、迷った時は「は」を使うという独自の文法があると考えている。「は」と「が」の選択にはさまざまな要因が絡んでおり、「は」の正答率が高いとあって、「は」の使い方を理解しているとはいえない。

これまでの先行研究では、中国語母語話者を対象に行った研究はわずかで、中国国内の日本語学習者を対象としたものは管見の限り皆無である。また、先行研究で使用されたデータは学習者の作文データあるいは単純な穴埋めテストがほとんどであった。それだけでは、「は」と「が」の習得状況を正確に把握できないと考える。さらに、これまでの調査では、調査項目が限られており、「は」と「が」の全般的な使い方についての考察はほとんどなされていない。そこで、本研究は、「は」と「が」の習得状況を

より明確に把握するため、先行研究を踏まえ、以上の問題点を考慮した上で、調査問題を作成し、調査を行うことにした。

3. 調査

3.1. 予備調査

中国国内の日本語学習者の「は」と「が」の習得の状況を調査し、誤用の傾向を把握するため、また、作成したアンケートの調査問題の妥当性を検証し、本調査で使う調査票の作成の参考にするため、2009年12月に中国広東省にある大学の日本語学科の三年生50名を対象に予備調査を行った。その結果、「は」と「が」の穴埋めテストの平均正答率は73%であり、正答率が一番低いのは従属節、連体修飾節における「が」の使用で、対比の「は」も正答率が比較的低いという結果が出た。一方、定型表現の「～のほうが」、対象を表す「が」とその主体を表す「は」の正答率は高かった。

3.2. 調査 I

3.2.1. 目的

中国国内の日本語学習者の「は」と「が」の習得状況の調査を行い、どのような誤用の傾向があるのかを明らかにし、誤用をまねいた原因を探る。

3.2.2. 対象

グループ1:中国四川省成都市のある大学の日本語学科の三年生 35 名。

グループ2:中国山東省青島市のある大学の日本語学科の三年生 50 名。

両グループとも、日本語学習歴は大学に入ってから2年間である。また、調査が行われたのは9月であり、日本語能力試験をまだ受けていないため、ほとんどの学習者は日本語能力試験の資格を持っていない。

3.2.3. 問題作成

アンケート調査問題は三部分からなっている。まずは学習者の背景、意識を問うフェースシートである。その次は、「は」と「が」の穴埋め問題であり、各答えに対し理由を述べることも要求した。最後は「は」と「が」の使い方についての自由記述問題

である。

「は」と「が」の使い方をできるだけ網羅するため、予備調査で参考として使われた『セルフマスターシリーズ はとが』(野田 1989) だけではなく、他の先行研究も参照した上で、「は」と「が」の使い方をまとめ、先行研究から問題文を収集した。全部で 32 問、63 項目である。

難解語彙が文法の選択に影響を与えるのを防ぐために、問題文をリーディング チュウ太³にかけて、語彙のレベルをチェックした結果、93%は 2 級以下の語彙になっていることが分かった。残りの 7%は人名などの固定名詞で、ほとんど意味の理解に支障がないと思われる。

3.2.4. 穴埋めテストの問題の妥当性と信頼性について

本調査で使用される問題の妥当性について言及する必要がある。問題文はすべて先行研究から引用したもので、会話形式の文も多く含まれている。実際の会話では、助詞を省略することが多いため、助詞を入れたほうが不自然ではないかという問題がある。本テストはあくまで日本語学習者の「は」と「が」に関する文法知識の程度を調べることを目的とするため、実際の言語運用能力と区別して考えることが必要であると考える。また、答えの正誤の判断と理由の正誤の判断も先行研究に従うことにしているので、日本語母語話者の間でも意見が分かれる問題がいくつかある。

「は」と「が」の 2 択問題にすると、恣意性が生じるため、テストの説明の部分で「は」と「が」の穴埋め問題とは明記していない。代わりに「正しいと思う助詞を書いてください」という表現を使用した。結果は誤答のなかに「を」、「に」などの回答もあった。しかし、学習者が回答を進めていくうち、「は」と「が」の二択問題だと気付いてしまう可能性が大きいので、恣意性を完全に排除することはできない。そのため、結果を見るとき、理由と合わせてみることにする。また、調査問題の妥当性を検証するため、予備調査を実施し、調査問題の有用性を確認した上で、先行研究と異なる結果が出た問題を排除し、新たに 13 項目を増やし、本調査用の問題を作成した。

3.2.5. 実施

調査は 2010 年 9 月に行った。グループ 1 の調査は筆者本人が実施し、実施時間は

² 佐治 (1959)、高見澤 (2007)、市川 (2005)、寺村 (1987)

³ リーディング チュウ太は、ネットで公開されている文章の語彙の日本語能力試験に相当するレベルを判定することができる読解学習支援システムである。

30分である。グループ2の調査は現地の日本語教師が自分の担当クラスで行い、実施時間は30分である。

3.2.6. 結果と考察

3.2.6.1. 穴埋めテストの正答率

予備調査をひとつのグループとして考える場合、表1で分かるように、三つのグループ間で、学習者の平均正答率、項目の平均正答率にほとんど差がない。地域、環境など異なる三つのグループで平均正答率にほとんど差がないということは、この75%という正答率が中国国内の日本語学習者の平均的な「は」と「が」の習得度を表しているのではないかとと思われる。

また、三つのグループの理由なしでの正答率が平均57%であり、半分以上の学習者は正しく答えたが、その理由については明白ではないことが分かった。理由が正答での平均正答率は僅か10%で、非常に低いことが分かった。そして、正答したものの、間違っただ理由を書いた7%の学習者は習得できていないと言えるのではないかと考える。

表1 穴埋めテストのグループ別の平均正答率

	学習者平均 正答率	項目平均 正答率	理由なしで の正答率	理由が正答 での正答率	理由が誤答 での正答率
グループ1	75%	75%	50%	14%	11%
グループ2	77%	76%	68%	5%	3%
予備調査	74%	73%	54%	10%	9%
平均	75%	75%	57%	10%	7%

3.2.6.2. 記述問題の結果と考察

グループ1とグループ2を合わせて85名のうち、49名が記述問題に答えてくれた。49名のうち、「は」と「が」の具体的な使い方に言及したのは12名で、他の37名は「よく分からない」、「直感で判断する」など、具体的な使い方については言及していない。学習者の答えから、「「は」は主語を表す、主語を提示する」ととらえている学習者が多いことが分かった。「「は」は「主題提示」と認識している学習者は2名しか

いなかった。「が」は「対象を表す」という機能はよく認識され、また、能力、好悪など慣用として覚えられていることも分かった。

そして、「は」と「が」の認識の中で、「強調する」という言葉がよく使われているが、おそらく「取り立てる」という中国語の解釈を、そのまま使っていると推測した。その場合、「は」の機能の一つと認識されるべきだが、「が」は強調を表す」という答えが半分を占めている。そこで調査を実施してくれた現地の教師にインタビューしたところ、「は」と「が」の使い方を説明するとき、「は」は後ろの述部を強調し、「が」は主語を強調するというルールで説明していることが分かった。「は」と「が」の使い方について、同じ用語で説明した場合は、学習者を混乱させる可能性があることが考えられる。

3.3. 調査Ⅱ

3.3.1. 目的

調査Ⅰの結果から、地域に関係なく、学習者の平均正答率及び全項目の平均正答率においてほとんど差がないことが分かった。しかし、項目別の正答率、正答率が高い項目、正答率が低い項目においては多少違いがある。グループ1、グループ2、予備調査グループの三つのグループでは、学習者の学習暦、レベル、言語環境において、ほとんど差がないと言える。唯一異なっているのは使っている教科書である。使用教科書は、それらの違いと関係があるのかどうか、また、学習者の「は」と「が」の習得にどのような影響を与えているのかを解明するため、教科書を調査することにした。

3.3.2. 調査する教科書

調査対象は予備調査グループ、グループ1、グループ2の三つのグループが使用した三種類の教科書である。初級と中級と合わせて全部で12冊である。詳しい内容は以下の表2にまとめた。

表2 調査する教科書

グループ	教科書	出版年	編著	出版社
予備調査グループ	標準日語教程初級上	2002	東京外国語大学留学生日本語教育センター 許羅莎他	北京大学出版社
	標準日語教程初級下	2003		
	標準日語教程中級上	2003	東京外国語大学留学生日本語教育センター 張慧明他	
	標準日語教程中級下	2005		
グループ1	新編日語 第一冊	1993	周平・陳小芬 (上海外国語大学)	上海外語教育出版社
	第二冊	1994		
	第三冊	1994		
	第四冊	1995		
グループ2	総合日語 第一冊～第四冊	2004	彭広陸・守屋三千代	北京大学出版社

3.3.3. 調査方法

教科書における「は」と「が」の使い方に関する文法説明の記述を網羅して調べる。統計ソフト SPSS を使って、各グループの正答率と教科書との相関を調べる。

3.3.4. 調査結果と考察

3.3.4.1. 教科書の調査の結果と考察

『新編日語』では、「は」の「主題」の使い方について説明があり、「対比」についても言及しているが、詳しい説明がない。「が」の「主語」と「対象」の使い方についてはかなりの説明がなされている。また、「が」は客観叙述に用いると説明されており、「排他」、「新情報」の用法については言及していない。さらに、複文における連体修飾節での「が」の使用について言及しているが、従属節での「は」と「が」の使用については言及していない。

『総合日語』では、「は」の「主題」の使い方について説明があり、「対比」についても簡単に説明されている。「が」の「主語」と「対象」の使い方についてはかなり詳

しい説明がある。また、「～は～が」文をかなり詳しく説明している。「が」は客観的事実の描写に用いると説明されており、連体修飾節での「が」の使用についても詳しい説明がある。しかし、『新編日語』と同様に、従属節での「は」と「が」の使用については全く言及されていない。

『標準日語教程初級』では、「は」の使い方を二つ、「が」の使い方を四つの項目を立てて紹介している。「は」は提示助詞で、「主題」、「対比」と説明されており、「が」は主格助詞で、「主語」、「現象文」、「対象」、「疑問文の主語」と説明されている。『新編日語』、『総合日語』と違って、この教材では、「は」と「が」の説明に「判断句」「現象文」などの日本語の用語を使用している。

以上の結果から、教科書における「は」と「が」の扱いは十分とは言えない状況であることが分かった。「は」の「対比」の使い方は一応説明があるが、詳しく説明されていない。「は」と「が」の使い分けにおいて、かなり有用だと思われる「新情報」「旧情報」に関する説明はほとんどない。特に、「は」は文の最後まで大きくかかる、「が」が一番近い述語に小さくかかるという「は」と「が」の使い分けにおいて、一番重要だと思われるルールについての説明もまったくない。また、教科書での従属節の扱い方を見ると、「から」、「ので」、「～と」などの接続助詞の説明をしているだけで、従属節という概念及び従属節での「は」と「が」の使い方にまったく触れていない。この調査の結果から、学習者の「は」と「が」の習得度を高めるには、教科書におけるより詳細な文法説明とより効果的な指導が必要であることが窺える。

3.3.4.2. 正答率と教科書の関係

各グループの各問題の正答率と教科書の関係を見るために、統計ソフト SPSS を使って相関分析を行う。具体的には、教科書に問題文のような文が文型として掲出されているかどうか、また、教科書の問題文の文法項目の文法説明があるかどうかを調べた上で、相関分析を行った。結果、三つのグループのうち、二つのグループにおいて、問題別の正答率と教科書に文型掲出の有無とはほとんど相関が見られなかった。そして、二つのグループにおいて、各問題の正答率と教科書の文法説明の有無とは正の相関が見られた。この結果から、助詞に焦点を当て、その使い方についての説明がなければ、教科書に文型として載っているだけでは、学習者が自然に習得することは難しいということが分かった。学習者の「は」と「が」の習得度を高めるには、教科書の改善と現場の教師によるより効果的な指導方法が重要であると考えられる。

4. 考察

4.1. 正答率が低い項目と正答率が高い項目

表3の正答率が下位10位の項目のうち、どのグループにおいても、「が」が七割以上を占めている。これは先行研究と一致する結果になっている。また意識調査で、半分以上の学習者が、「は」より「が」のほうが難しい」と答えている結果とも一致している。三つのグループにおいて、従属節の中の「が」の使用、対比の「は」、名詞節における「が」の使用などの項目が共通している。特に「従属節の中」の「が」の項目が目立つ。また、教科書の調査の結果と合わせてみると、下位10位のうち、教科書に説明がない項目はグループ1では、「対比」以外の9項目であり、グループ2では、「否定」、「対比」以外の8項目であり、予備調査グループでは5項目である。全体から見ると、正答率が低い項目のうち、教科書に説明がないのは約73%を占めている。また、「対比」については、説明があるが、詳しい説明はなされていない。したがって、これらの項目の誤用が多い主な原因は教科書にあるのではないと思われる。

表3 三つのグループにおける正答率が下位10位の項目

	グループ1			グループ2			予備調査		
	文法項目	正答	正答率	文法項目	正答	正答率	文法項目	正答	正答率
1位	排他	が	6%	従属節の中	が	12%	従属節の中	が	12%
2位	名詞節の中	が	29%	従属節の中	が	32%	従属節の中	が	18%
3位	主語の選択	が	31%	名詞節の中	が	34%	名詞節の中	が	30%
4位	対比	は	31%	否定	は	36%	疑問詞の後	が	34%
5位	主語の選択	が	34%	排他	が	40%	意外な出来事	が	42%
6位	従属節の中	が	37%	対比	は	40%	従属節の中	が	42%
7位	従属節の中	が	37%	主語の選択	が	46%	比較文	が	44%
8位	意外な出来事	が	43%	対比	は	48%	連体修飾節の中	が	44%
9位	従属節の中	が	43%	新情報	が	50%	対比	は	44%
10位	真理	は	43%	主語の選択	が	50%	現象文	が	46%

* 太字となっているのが教科書に説明がない項目である。

正答率が95%以上の項目では、易しいと思われている「は」が多いわけではなく、「は」と「が」がほぼ半々という結果が出た。「が」の中で一番多いのは、「対象」の「が」である。そのほか、存在文、慣用の「が」も正答率が高い。それらの項目に、学習者が書いた理由には、「～が好き」、「～がある」、「～ほうが」などが多く見られ、学習者はセットとして覚えた可能性が大きい。教科書には、それらの項目は「～が好き」「～ほうが」のように、文型として掲出されているため、学習者にとって定型表現として記憶されやすいと思われる。また、三つのグループをまとめて見ると、正答率が95%以上の項目のうち、約87%の項目について、教科書に説明があることが分かった。

以上の結果から、教科書が各項目の正答率と深く関係していることが言える。したがって、「は」と「が」の誤用を避けるため、まず改善しなければならないのは教科書における説明であると言えよう。教科書で「は」と「が」の用法について、より広く、より詳しく説明する必要があると考える。しかしながら、教科書の改訂は簡単なことではない。現場の教師にとって、すぐに解決できる問題ではない。「は」と「が」の指導に関しては、教科書だけを頼りにせず、「は」と「が」の使い方を全般的に把握することが教師にとって必要なことである。また、比較的習得しやすいものと比較的習得しにくいものが存在することを理解し、さらに、それぞれどのようなものなのか、その特徴や傾向を把握した上で、習得しにくいものに重点を置き、学習者を指導することが効果的であると考えられる。

4.2. 正答率が低い項目の理由の考察

4.2.1. 従属節での「が」

問題22 私（ ）遊んでいる時、山田さんは勉強していました。

この問題は独立度が低い「～時」従属節の主語を「が」で表すという文法知識をチェックする問題である。グループ1では、正答率が43%、グループ2では、正答率が32%で、両グループにおいて誤用が非常に多い項目の一つである。学習者の書いた理由を見てみると、理由を書いてくれた22人中、18人は「対比」、3人は「主格、主語」、1人は「強調」と書いた。学習者は「私（ ）遊んでいる時」を従属節として認識できていないことが分かった。そして、間違った理由の中で、一番多いのは「対比」である。この文を中国語に翻訳するとき、「我玩的时候山田在学习」となり、意味から確かに「私」と「山田」を比較しているように感じられる。日本語の構文を理解す

るより、母語での意味理解が優先されたことが、学習者の誤用を招いた一つの原因ではないかと思われる。「対比」と答えた学習者が「は」の「対比」という使い方について、十分に理解できていないことも原因の一つだと推測される。

問 19 外の音 (①) うるさいですから、窓を閉めたほう (②) いいですよ。

問題 19-①は二つのグループのそれぞれの正答率が 37%、32%であり、両グループにおいて誤用が非常に多い項目の一つである。誤答者の書いた理由を見てみると、「強調」「主語を表す」「修飾」「原因の陳述」「判断句」などいろいろあるが、「従属節」と認識できたのは正答者も含めて一人もいなかった。

問題 30 何度も禁煙宣言をしても、たばこを吸いだす A さん。「意志 (①) 弱いなあ」とわたし (②) 言うと、別の人が「みんなからあれだけ言われても吸うの (③) 意志 (④) 強い証拠」。

問題 29 「きょう試験 (①) 終わった後、一緒にカラオケに行かない。」

「ごめん、僕 (②) アルバイト (③) あるから、すぐ帰らなければいけないんだ」

30-②は条件従属節での「が」の運用についての問題である。二つのグループの正答率はそれぞれ 37%、54%である。理由を書いた 7 人のうち、「主語を表す」が 3 人、「私」を強調」が 3 人、「助詞」が 1 人であった。そして、正答者のうち、一人だけ「小主語」(従属節の主語) と書いた。

29-①の問題は 30-②と同じく従属節での「が」の運用の問題であるが、グループ 1 とグループ 2 の正答率グループ 1 とグループ 2 の正答率がそれぞれ 68%、74%である。他の問題と比べてかなり高いことが分かる。その差の原因はどこから来たのであろう。答えの理由を見ると、「～が終わる」「自動詞」などがほとんどである。ここでは、学習者は従属節と認識していないが、自動詞の対象に「が」を使うというルールをある程度習得しているため、正答に至ったと推測できる。

以上の考察から、「従属節」という概念が、ほとんどの学習者の意識にないことがわかった。そして、このことが誤用を招いた主な原因であると思われる。さらに、学習者が使っている教科書には、従属節及び従属節における「が」の使用についての説明がないことが根本的な原因ではないかと思われる。中国の日本語教育の現場では「は」と「が」に対する指導が不足していることが示唆された。

4.2.2. 「排他」の「が」

問題 2 「すみません、村田さんですか。」

「いいえ、違いますけど。私 (①) 川田です。」

「村田さん (②) どちらでしょうか」

「あそこに背の高い男の人 (③) いますね」

「ええ」

「あの人 (④) 村田さんです」

問題 1 「今度のパーティー、うちの課から誰が行ってこないかな。」

「課長、私 () 行きます。」

問題 28 「先生、この荷物、私 () お持ちしましょう。」

2-④の問題はグループ1では、正答率が最下位で6%しかなかった。グループ2は正答率が40%で、下位6位である。誤答者の書いた理由を見てみると、20人のうち9人が「主語を表す」、3人が「あの人を強調する」と書いた。それらの理由から答えに「が」が当てはまるのに、「は」を書いてしまった。つまり、「主語を表す」「主語を強調する」という機能は「は」の機能であると間違った認識をし、「は」と「が」の区別については習得していないことが言える。

問題1は両グループの正答率がそれぞれ60%、84%で、問題28は両グループの正答率がそれぞれ57%、84%である。特にグループ2は、問題1と問題28ともに比較的高い正答率を出している。正答者の理由のほとんどは「私を強調する」「主語を強調」「動作の担当者を強調」という理由である。ここでは、「主語を強調する」と「排他」と通じるところがあることが学習者を正答に導いたと思われる。

問題2-④と問題1、問題28はともに「が」の「排他」の用法の理解を調べる項目であるにもかかわらず、正答率にかなり差がある。これは多くの教科書では、早い段階で、「これは本です」「あの方は誰ですか」「あの方は田中さんです」のような文が導入され、指示詞の後ろに「は」を使うという先入観を学習者に与えている可能性があることも関係していると考察する。

4.2.3. 名詞節での「が」

問題12 「ねえ、知ってる。森山さん () 旦那さんと初めて会ったのはこの喫茶店だって。」

「ええ、そうなんだ」

この問題はグループ1の正答率が29%、グループ2の正答率が34%であり、両グループともに誤用の多い項目である。誤答者の理由を見ると、「主語を表す」という理由が半分以上にもなっている。やはり「は」と「が」の両方を「主語を表す」助詞と認識し、その使い分けは混乱している様子が窺える。また、教科書に名詞節についての説

明がほとんどないため、名詞節内での主語に「が」を使うというルールは学習者に習得されていないことが推測される。

4.2.4. 対比の「は」

問題 27 「木村さんは料理 (①) できますか。」

「私は食べるの (②) 好きですが、作るの (③) ちょっと苦手です。」

問題 32 「田中さん (①) 中国語 (②) 読めますか。」

「意味 (③) 分かりますが、発音 (④) できません。」

27-②③と 32 の③④は対比を表す「は」を補う問題である。

グループ 1 では、32-③④の正答率がそれぞれ 31%、43%であり、27-②③と比べて、誤用がかなり多いことが分かった。27 の問題は「食べる」と「作る」、「好き」と「苦手」という言葉から、「対比」と考えやすいことが関係していると思われる。

一方、グループ 2 では、27-②と 32-③の正答率がそれぞれ 40%、48%であり、誤用が比較的多いことが分かった。これは、「～が好き」「～が分かる」の表現を文型として教えられ、定型表現として覚えてしまい、接続詞「が」には前項と後項との「対比」という機能があることを認識している学習者が少ないためではないかと思われる。

また、両グループにおいて、32-③より 32-④の正答率が 10%以上高い。これは、32-③は「～が分かる」という定型表現が適用されてしまい、誤用を招いたのに対し、32-④は後ろのほうが「できません」となっており、「否定」の場合「は」を使うというルールと偶然に一致したため、正答率が比較的高いことになったと推測できる。

学習者の書いた理由を見ると、「固定用法」「文型、～が好き」「～ができる」のような理由がほとんどである。このように、学習者がユニットで覚えてしまうことを「ユニット形成のストラテジー」という。これは、ある言語項目が前または後ろの語と一つの塊として処理されることをさす (迫田 2002)。以上の問題から、このストラテジーは言語項目を記憶するのに便利かもしれないが、言語項目が理解されてないまま記憶された場合、誤用を招くこともあることを示唆している。

「対比」は、話し手の気持ちを表す部分が多いので、日本語の母語話者でも意見が分かれやすい項目のひとつである。学習者に教える際、「対比」になりやすい環境を十分に説明し、理解してもらった上で覚えてもらったほうが良いと思われる。

5. まとめ

5.1. 結果のまとめ

本研究は主に中国国内の日本語学習者を対象に、「は」と「が」の習得状況の調査を行った。その結果、三つの地域の異なるグループにおいて、学習者の平均正答率、項目の平均正答率にほとんど差がないことが分かった。また、傾向としては、誤用が多い項目のうち、「が」の誤用が七割以上を占め、特に従属節での「が」、「排他」の「が」などの項目での誤用が目立つ。一方、誤用の少ない項目のうち、「が」と「は」は半々であり、対象を表す「が」の機能はよく認識され、能力、好悪などを表すものは慣用として覚えられていることが考察できた。誤用の原因を解明するため、誤用の多い項目に対して質的分析を行った。そこから、文に対する「母語での意味理解」が「は」と「が」の習得に負の影響を与えていることが窺われた。

誤用の原因をさらに明らかにするため、各グループの使用する教科書の文法項目に関する調査を行った。その結果、教科書における「は」と「が」の扱いは十分とは言えない状況であることが分かった。特に「従属節」及び「従属節での「が」の使用」については全く触れられていない。そして、項目別の正答率と教科書との関係について相関分析を行った結果から、教科書における文法説明の多少が「は」と「が」の習得にかなり影響を与えていることが分かった。学習者の「は」と「が」の習得度を高めるには、教科書における「は」と「が」のより詳細な文法説明が必要であることが示唆された。

以上の結果から、「は」と「が」の誤用が起きる主な要因は三つあると考える。まず、佐治 (1953) が述べたように、「は」と「が」は「主語」「主格」「主題」といった日本語の構文の最も重要な部分に関わり、述語とともに日本語構文の根幹を担うものであるだけに、その現れ方も複雑であって、それが「は」と「が」の理解の困難な理由の一つになっている。そして、今回の調査で明らかになったのは、「は」と「が」の習得には教科書が深く関係していることである。また、もう一つは母語での意味理解の影響があるのではないかと考える。

5.2. 日本語教育への提言

「は」を導入する際、必ずその主題を表す機能を説明する。そして、主題とは「主語」と限らないこと、主格以外の成分が主題になった場合の例を挙げて説明する。「が」

を導入する際、より理解しやすくするために、「主語」という説明のほか、「動作・状態の主体」という説明も加える。説明は中国語でも通じるところがあるので、学習者にとって難しくないと思われる。

中級の教科書で、従属節を持つ文が多くなってきた場合、接続詞を説明する際、従属節及び従属節内での「が」の使用も合わせて説明する。また、「「が」は小さくかかる、「は」は文末まで大きくかかる」と「従属節の主語と主文の主語が一致した場合は「は」を使う、従属節の主語と主文の主語が違う場合は、従属節の主語に「が」を使う」という、「は」と「が」の使い分けにおいては、非常に重要な二つのルールを詳しく説明する。

「は」と「が」の使い方において、学習しやすい項目と学習しにくい項目が存在することを念頭に置き、それぞれの項目の特徴や傾向を把握した上で、学習しにくい項目に重点をおき、例を挙げて詳しく説明したり、練習問題を作って練習させたりするのは効果的であると考ええる。

学習者の母語での意味理解が「は」と「が」の習得に負の影響を与えかねないため、文の説明をするとき、学習者の母語での意味の説明より、文の構造に着目した説明をしたほうが良いと考える。

6. 終わりに

本研究は中国国内三つの地域で日本語学習者 135 人を対象に「は」と「が」の習得状況のアンケート調査を行った。しかし、2006 年の調査では中国の日本語学習者はすでに 68 万人と言われている⁴。この数字に比べると、135 人はいかにも少数である。今後、地域、人数を増やし、さらに調査する必要があると考える。

本研究では、筆者が先行研究を参照して、「は」と「が」の使い方の一覧表を作成した。この一覧表の項目を学生に一括して教えた場合に、どのような効果があるのかを実際に調べてみたい。そして、より効果的な指導法を探りたい。

現状では、教科書に「は」と「が」の扱いが明らかに不足しているが、それをすぐに改善することは簡単なことではない。したがって、中国国内の日本語学習者の「は」と「が」の習得をサポートするため、本研究の結果を参考に、無料公開の WEB 教材を作成していきたいと考える。

⁴ 国際交流基金日本語教育国別情報 2009
<http://www.jpff.go.jp/japanese/survey/country/2009/china>.

参考文献

- 市川保子 (1997) 『日本語誤用例文小辞典』 凡人社
—— (2005) 『初級日本語文法と教え方のポイント』 スリーエーネットワーク
- 金城尚美・謝福台 (2005) 「日本語学習者の「は」と「が」の使い分けに関する一考察」『琉球大学留学生センター紀要留学生教育第2号』
- 坂本 正 (1996) 「助詞「は」と「が」の習得について—文法判断テストについて—」
『平成8年度日本語教育秋季学会予稿集』
—— (1997) 「第二言語習得研究と日本語教育—「は」と「が」について—」『日本語教育異文化の懸け橋』 アルク
- 佐治圭三 (1959) 「外国人にはどうしてハとガの違いがわからないのか」『国文学』 五月号
- 迫田久美子 (2002) 「第二言語習得に関わるさまざまな要因」『日本語教育に生かす第二言語習得研究』 アルク
- 高見澤孟 (2007) 『新・はじめての日本語教育1 日本語教育の基礎知識』 アルク
- 寺村秀夫 (1987) 『ケーススタディ・日本文法』 桜楓社
- 野田尚史 (1989) 『セフル・マスターシリーズ1 はとが』 くろしお出版
—— (1996) 『新日本語文法選書「は」と「が」』 くろしお出版
—— (2001) 「文法の理解と運用—「分かった」と「使える」は違う」『日本語学習者の文法習得』 大修館書店 pp121-138
- 松下大三郎 (1914) 『標準日本文法』 紀元社 (1975 『改撰標準日本文法』 勉誠社)
- 三上 章 (1953) 「ハとガの使分け」『語文』、『三上章論文集』 1975 収録くろしお出版
—— (1960) 『象ハ鼻ガ長イ』 (『象は鼻が長い』 増補版 (1964) くろしお出版
—— (1965) 「「は」と「が」の研究法」『日本語教育』 7号 pp21-31
- 八木公子 (1996) 「初級学習者の作文に見られる日本語助詞の正用順序—助詞別、助詞の機能別、機能グループ別に—」『世界の日本語教育』
—— (2000) 「はとがの習得—初級学習者の作文とフォローアップインタビューの分析から—」『世界の日本語教育』
- 山田孝雄 (1950) 『日本文法学要論』 角川書店 (2009 『山田国語学入門選書 日本文法学要論』 書肆心水)
- リーディング チュウ太ホームページ <http://language.tiu.ac.jp/>

(しょう そうえん・首都大学東京大学院生)